

149. 甲状腺癌の ^{131}I 治療効果について

信州大学 第二外科

官川 信 渡辺 豊昭 牧内 正夫
降旗 力男

〔目的〕 甲状腺癌の外科的治療において、切除不能であったり、遠隔転移があって根治手術が不能な例に対して ^{131}I 治療が試みられている。しかしながら ^{131}I 治療の適応や効果判定については、いまだ明確な基準はない。このような観点にたって、われわれは甲状腺癌の ^{131}I 治療効果について臨床的ならびに病理組織学的検討を加えた。

〔症例ならびに検索方法〕 われわれのところで行なった ^{131}I 治療例は 8 例であるが、そのうち 3 例は ^{131}I 治療後に転移巣の試験切除を行なっている。今回はその 3 例について症例を検討し、これら症例から ^{131}I 治療の

適応、治療効果、さらに治療効果と組織学的所見について検討した。

〔考案ならびに結論〕 1. ^{131}I 治療の適応は、病巣の組織像が濾胞構造を有することが必要であって、分化型でも濾胞構造を有していないものは効果がうすい。しかし原発巣と転移巣とでは組織型が、異なるものもあるので十分な検索が必要である。2. ^{131}I 治療の効果からみれば、正常甲状腺組織を切除することが必要であるが、 ^{131}I による ablation より外科的に正常甲状腺組織を切除することがのぞましい。また個体のたえうる大量の ^{131}I の投与が治療効果を増すことはいうまでもない。3. 治療効果のある組織学的所見では、濾胞を構成する腫瘍細胞の核、胞体の扁平化、濾胞の崩壊、腫瘍細胞の消失、線維性の癒痕組織へと変化する変性・退縮の過程を認めた。